

襖の下張り

平成二十九年一月八日

家に襖が何枚あったか、数えたことがありませんが、解体で退避した襖を数えると約三十枚でした。建具のネズミにかじられた箇所、すり減った部分の修理を始めています。修理の前に唐紙を取除きました。その時剥がした下張を文字がある紙片で分離すると千片を越えました。そこから興味深かった建物関連、大坂からの手紙、買物リストなどを紹介します。

◆建物関連

前半が欠けていましたが(左下写真)、修復工事担当文健協殿に確認をお願いしました。さらに調べると別の襖から前半(次頁写真)ありこれもお願いしました。
書出し

正月十日 杉薄板
一九匁六分 式間

二月四日 文樽木^(重)
一五分 壺本

同日 壺間敷
一壺匁九分五り 三丁

同日 九尺四寸三寸五分
一式匁 壺丁

二月十一日 松壺寸
一壺匁 壺枚

同日 松板
一三匁六分 并八分^(重)

同日 杉板
一三匁四分 五枚

同月十四日 一吋五分
一壺匁 百五十

同日 一吋
一壺匁 式百本

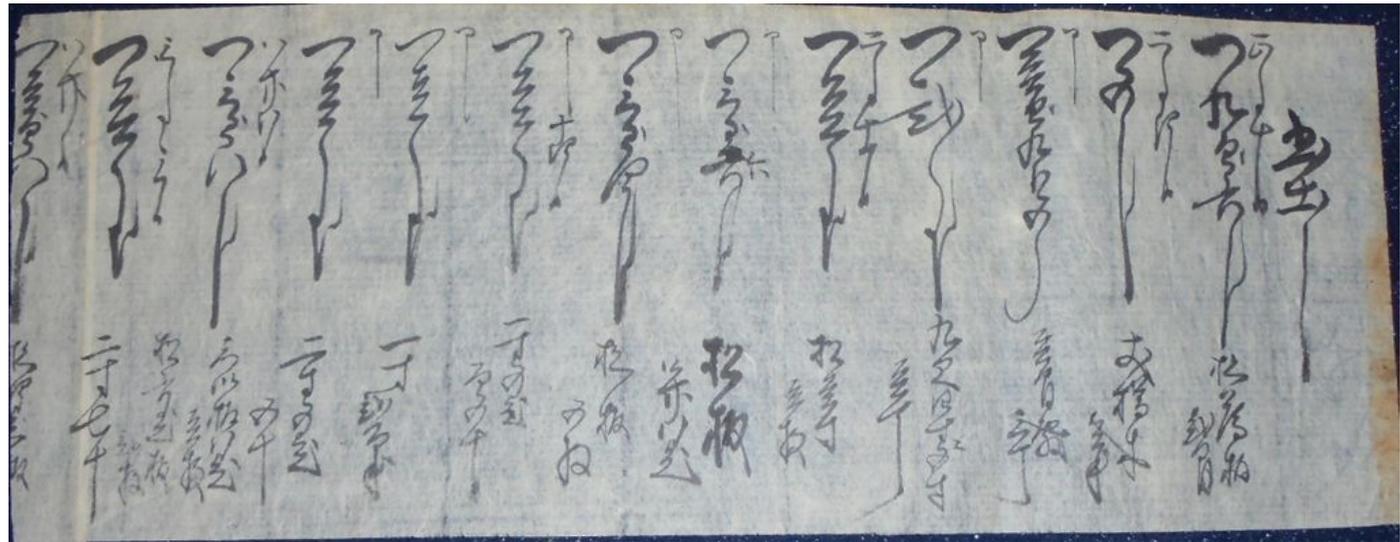
同日 二吋五分
一壺匁 五十

同廿八日 志以板八分^(し)
一三匁八分 壺枚

三月三日 松六分板
一壺匁 式枚

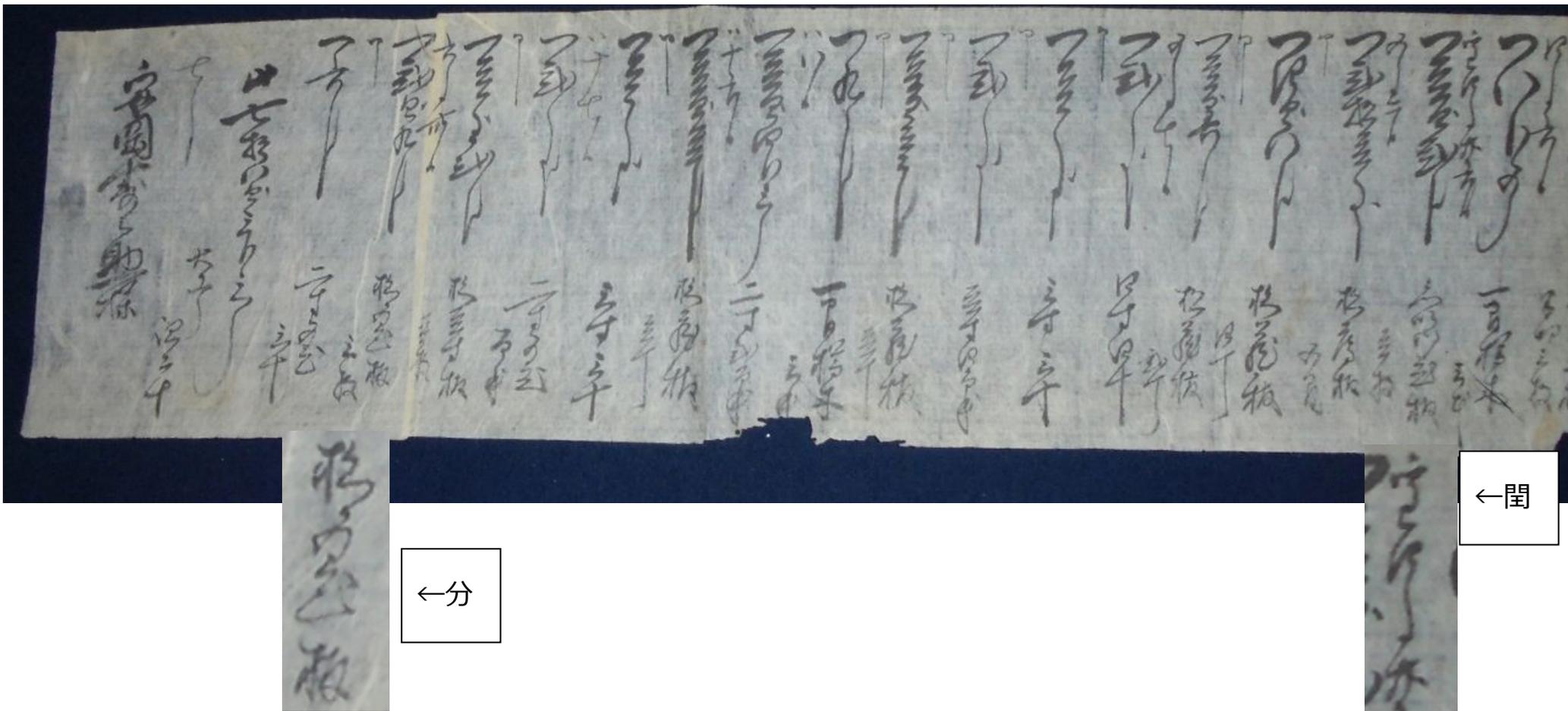
同廿日 二吋七十
一壺匁八分 杉四分板

四月六日 半切三枚
一八分五り 一間樽木^(重)



閏四月廿六日	三本	
一 老刃 貳分	志以八分板	
五月三日	老枚	
一 貳拾老刃	杉薄板	
同日	五間	
一 四刃 八分	杉藏拔	
同日	四丁	
一 老刃 六分	松藏拔	
五月七日	貳丁	
一 貳刃	四寸 四十	
同日	三寸 三十	
一 老刃	三寸 三十	
同日	壹寸 四百本	
一 貳刃	松藏拔	
同日	老丁	
一 九分	一間 樽木	
同日	三本	
同八日	二寸 貳百本	
一 老刃 四分 三り	杉藏拔	
同十六日	老丁	
一 老刃 壹分	三寸 三十	
同日	二寸 五分	
一 老刃	百本	
同十七日	松老寸板	
同日	老枚	
一 老刃 貳分	松五分板	
六月卅日	三枚	
一 貳刃 九分	二寸 五分	
同日	三十	
一 六分	大工ノ	
七月	次平	
安岡寿之助様		

最初、藏の字が読めたので文助日記に藏の建直しを天保七年に行ったとあるので、安岡寿之助(三代目安岡覺兵衛の幼名文助の兄)が藏建て直



←分

←閏

した考えました。が、文建協殿の翻刻・調査で蔵貫は蔵と関係なく「大貫」などと同じ資材名称で、建物の「蔵」ではありませんでした。これらの翻刻で次のことも教わりました。『「分」と翻刻している部分は、「分」をこのような崩し方とする例は見たことがなく、「ひ(飛)」に似ているのですが、「ひ(飛)」ですと意味が通らないので、「分」に飾りを付けた崩し字ではないかと思われれます』(前頁下部参照)。

この資料に年が記載されていませんが、安岡寿之助(我家三代目安岡覺兵衛の幼名)の時代と、この閏四月記載から天保九年と判明します。この閏月は六十干支(甲子など)と同様に年代推測する重要な古文書の情報です。天保九年にどこかに建物が建てられた。もしかして米蔵の前の納屋か。

さらに整理していると建物関連と思われる紙片が一枚出て来ました。前半がありませんが、それも翻刻を文建協殿にお願いし、次の結果を得ました。

一 貳匁貳分	□□分板	同十二日 かへ
	壹枚	一 壹匁三分五厘
同日 かへ		くれ板 ^(樽)
一 貳匁八分	杉壹寸	貳枚
	壹枚	同日 かへ
同九日 かへ		一 六分五厘
一 三匁三分	貳寸五分	く王ぶろ ↑
	百五十	代
同十日 かへ		一 七拾八匁貳分六厘
一 三匁九分	松壹寸	大工ノ
	二枚	次平
	志以八分板 ^(七)	安岡源右衛門様
	壹枚	

宛先が安岡源右衛門で寿之助(幼名)から安岡源右衛門に改名したのが天保十年です。釜屋の西に増築が、柱に残された墨書から天保十年となっています。この文書はこの記録と思いましたが。すると『今回の文書内に「くれ板」があり、縁の長手方向に張った縁を「くれ縁」といい、これに用いる板を指すのですが、釜屋には縁がないので、他の建物に用いたものと思われれます。(隠居屋?)』と辻田さんから指摘されました。

残っている資料で源右衛門の天保十年以降の文書で貢物関連でないのを調査すると、いずれも天保十四年ですが、一つは郷士の初駆の騒動関連と、弓の稽古の記録です。その弓稽古に地域の郷士も数多く参加し社交場の感です。安岡源右衛門の稽古日数は特出し年に二百十三日です。この射場の建立か、改築したと推測しました。天保九年戌年根居差引帳に矢立を大工重八が作ったとありますので、天保九年も納屋でなく射場かも知れません。この弓術も十五年後の安政には銃・砲術に座を奪われていきます。

前の翻刻の後半にある「く王(わ)ぶろ」(*王 わの変体仮名)は鍬風呂で農具の「鍬の一種で木の板に刃床部を作り、刃先のみを鉄を接合した。刃床部の木製部分を風呂と言った」または鍬の柄を入れる部分を鍬風呂言うことも聞きました。いずれにしても、地主生活でも農作業の道具は用意していたのですね。専門用語を教えてください。頂き推理を助けて貰い二枚の下張などから新しい発見が出来ました。

この下張りからのもう一つの発見。現在の修理保存工事は国、県、市の予算で動いていますので、業者さんへの支払いは年一回です。大工次平さんも工事開始から竣工まで一回の請求で、それも資材だけです。人役賃は別の請求があるのか知れません。一括請求は資産がないと出来ない運営、大規模な大工だったか次平、家の記録からは大工次平はこれ以外に登場しません。

◆中井先生 大坂学問所

次に紹介するのは後が切れ、書いた人、宛先、発信日も欠けている手紙と思われる七行の資料(左写真)です。この資料を見てまず、読めた字が「中井先生」と「大坂今橋」です。専門知識を持たない者にはインターネットは便利で、これらをキーワードで検索すると「懷徳堂は享保9(1724)年、中井贅庵(しゅうあん)らが創設した学問所で明治2年に廃止されるまで145年にわたり、中井竹山(ちくざん)・履軒(りけん)、五井蘭洲などすぐれた指導者のもとで、山片番挑(ばんとう)、富永仲基らを輩出する」そしてその場所が今橋の尼ヶ崎にあったとあり、「読めた字」と合致します。懷徳堂では全国の子弟を武士・庶民の別なく入学させ、主に朱子学を教育したようです。それで興味を持ち崩し辞書を引きながら翻刻(不明文字が多いですが)を次に示します。

従大坂一筆致啓上□ヲ以於有事之

去□

故御平安ニ可被成御□様子之と存候

□□事毛ル□在坂毛他事

□□

相可、里候只今ハ中井先生

学■

行納ニ而学寮ニ滞宿致居候

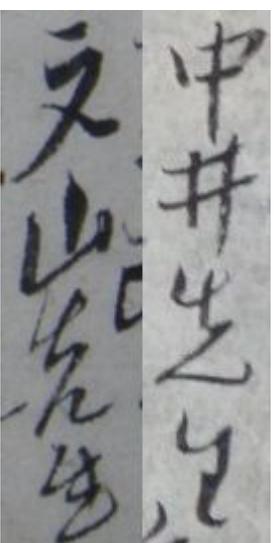
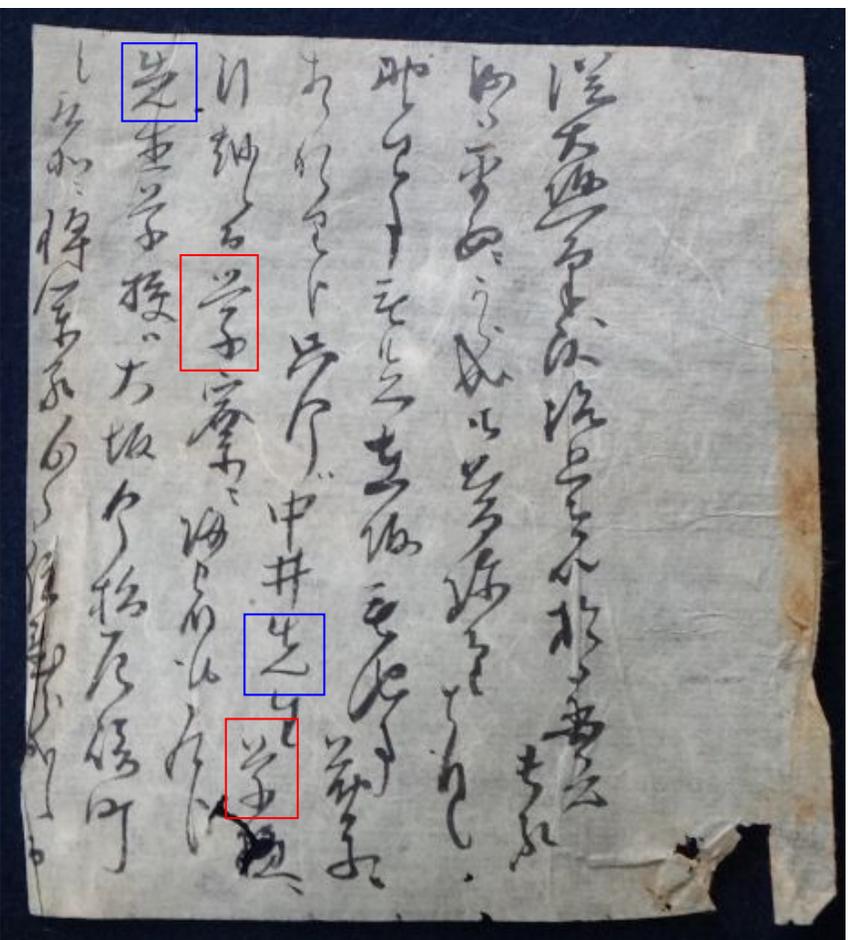
先生学校ハ大坂今橋尼崎町

候其処ニ將軍家方住置被成候□

自分勝手な解釈で文字だけ追って読むと「大坂に到着し、手紙を出しています。大坂は平安です。(不明)他事に関わっていました。現在は中井先生の下で学業を行ない、学寮に滞在しています。先生の學校は大坂今橋尼崎町です。ここは將軍より認可された・・・」となりました。最後の將軍云々はこの学問所(懷徳堂)が享保十一年將軍徳川吉宗などの援助があり半官半民の學校だったことを言っているでしょう。

問題は誰が何時、誰宛に出した手紙かです。作者を安岡関係者に限っても別に紹介した廣助の旅行から何人も行っています。紹介しましたように廣助の大坂の行動不明点がありますが、訪ねて学業する雰囲気は日記にはありません。安政四年頃、恒之進も高知江戸往復しその旅日記があります。訪ねたようなことは書かれていません。また、香我美郡王子村(現在の香我美町徳王子岩井孫六も同じ時期の同じような江戸日記がありますが、そこにもこの学問所訪問のことは書かれていません。裏付けなしの雰囲気から、学問所を知っている考えられる最有力は覺之助で、安政四年に長崎から江戸へ行き高知に戻り、その後も上坂しています。

字の鑑定をと京都から嘉助に宛てた手紙に書かれて先生の字(下写真左)と中井先生のを比較してみます。似てない。因に手紙に二箇所ある先生と学の字が同じ。崩し字でも癖が出ています。文書の前半の「平安ニ可被成」の箇所も気になります。「大坂に来たら大坂は平安」と読むと勤王だなんだの京師比べ平安だとすると文久以降となりますが、それでも覺之助、恒



之進、権馬、覚馬、道之助等候補者が複数います。今回の探索はこれ以上出来ないのここまですまします。手紙の発信者、宛先、時期は判明しませんでした。大坂で勉学に励んだ人がいたことを知る事ができました。

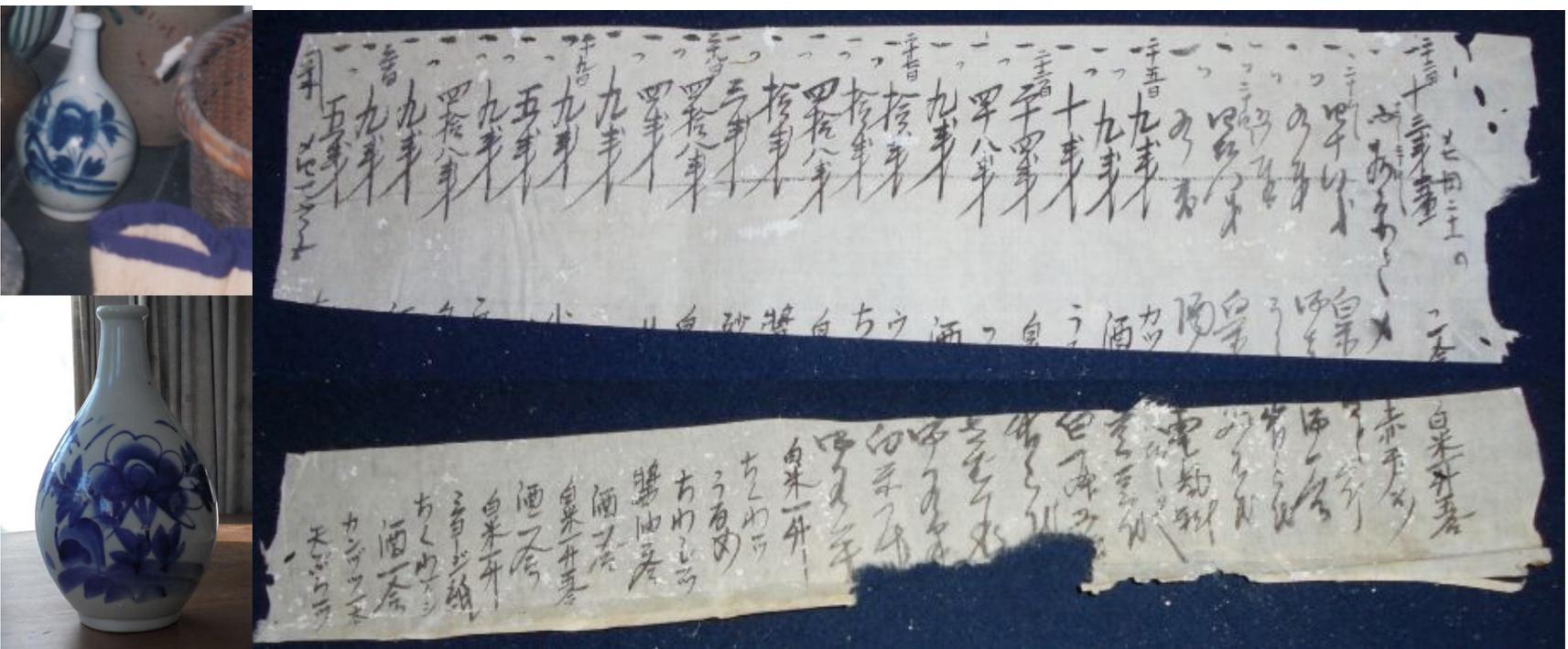
◆断片・家計簿

今度は家庭生活に入り込みます。

日常の食事関連の家計簿がありました。金銭の単位などから近世に入って作られたと思われます。複数に切断され完全に一枚に繋げません。そこから二片(下写真 上と下の断片は関連無し 形式確認のため連結)を紹介します。一片(下側)に品物のリスト 白米一升五合、みそ、電気料、ちくわ一ツ、うるめ、たわし一ツ、醤油二合、酒■合、白米一升五合、酒二合、白米一升、シヨージ紙、ちくわ□シ、酒一合、カンヅツ一本、天ぶら一ツ、もう一片(上側)に日付と金額のリストが書かれています。日付と金額を見ると 二十二日 十三銭五厘・二十三日 四十銭五厘・二十四日・・と毎日買物を行い、金銭単位が銭、厘ですので明治以降で電気料の項目がありますので昭和初期でしょうか。これらの品の買物を毎日することは山北でできないでしょう。安岡章太郎の小説に「酒屋へ三里、豆腐屋へ二里」があります。この小説がY村一里先の赤岡町まで行けばあるし、酒は家近くの前田の店にありましたから事実上「酒屋は近く、豆腐屋へ一里」ですが、これでは小説になりません。

昭和初期安岡の家では白米、味噌、醤油自家製なので他家の家計簿と思われる。何か他人の家を覗く感じでもう少し探訪をしてみます。

白米を二日毎に一升ほど購入しています。現在の核家族では考えられない量です。ウルメ、ちくわを毎日のように購入しています。海沿いの家で新鮮なのを毎日購入出来たのでしょうか。品に惣菜関連が見当たりません。自家製の野菜を料理していたのでしょうか。酒を毎日のように一から二合購入しています。ウルメ、ちくわをつまみで飲んでいる旦那が目には浮かびます。酒屋が近くにあったのでしょうか。酒の購入と言えば現在花瓶(下写真の左側)として使っていますが、これ遠く北海道の民族資料館で見掛け(下写真の上側)しました。そこに説明書きとして、酒を量り買いするための瓶とありました。こんな瓶を持って毎日酒を買いに行っていたのでしょうか。



お話

夕暮れ外仕事からおかみさんが帰って来る。井戸端で手を洗い酒便を持って出掛ける。酒を一合買って帰り道にカマボコとウルメを買い求め家に帰り、カマボコを切って酒瓶と一緒にちやぶ台に置き夕食の準備を始める。旦那が戻り、ちやぶ台の酒をカマボコをつまみで飲み始める。子供達も戻ってくる。おかみさん焼けたウルメを渡す。暗くなり裸電球を点ける。カマドの飯が炊け家族四人の夕食が始まる。一日の出来事を話し、おかみさん後片付け、電気を消し皆床に就く。朝、食事を待つ間、旦那が昨日の買物を聞きながら家計簿を付ける。「今日は御祝いだからてんぷらのご馳走 お米も無くなつた」とおかみさんが言う。旦那は懐から金を出し渡し仕事に出掛ける。

◆断片・買物リスト

前項の家計簿で安岡が山北で購入した家計簿でないと言いましたが、食べ物など日用品を購入した記録(下写真上側)がありました。正月から九月までの記録です。「書出し」が始まるので、家計簿の記録でなく請求書と推定します。資料は後が切れており九月で終わっていますが、多分一年分の請求書、とすると年単位でツケ買っていたことになりました。品名、個数とその代金が記載され、貨幣の単位が匁・分・厘ですので藩政時代でしょう。購入した品、日付、個数を次に示します

・とを婦(豆腐)を正月廿五日、二月十一日、

七月十三日、九月八日に六丁、三丁、式丁、

六丁と九月までに十七丁購入

・酢を九月までに三升、壹升貳合、貳升、

六合五勺、八合、七合、七合。壹升六合、

七合と三四半期で一斗一升三合五勺購入

*醤油、味噌は自家製していました。酢は自家製ができないのか。それでもこんなに使うものなのだろうか。

・刻たばこ、たはこ(た者古) 毎月壹斤ほど購入

一斤〓百六十グラム

*廣助の旅日記でキセルのお土産がありました。「たばこ」購入のルートはあったのです。

・そふめん 六月、七月に購入 個数の記載無し

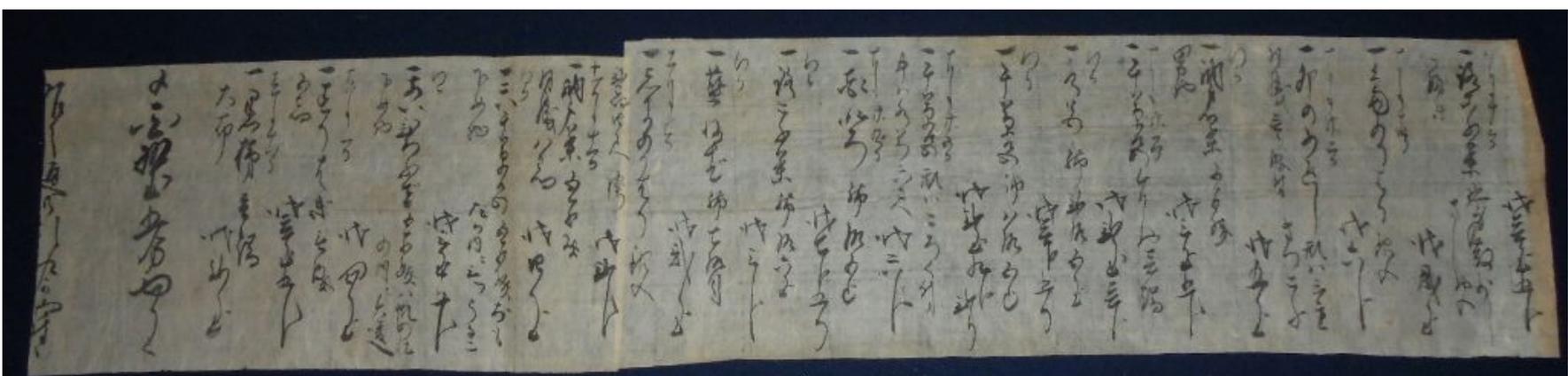
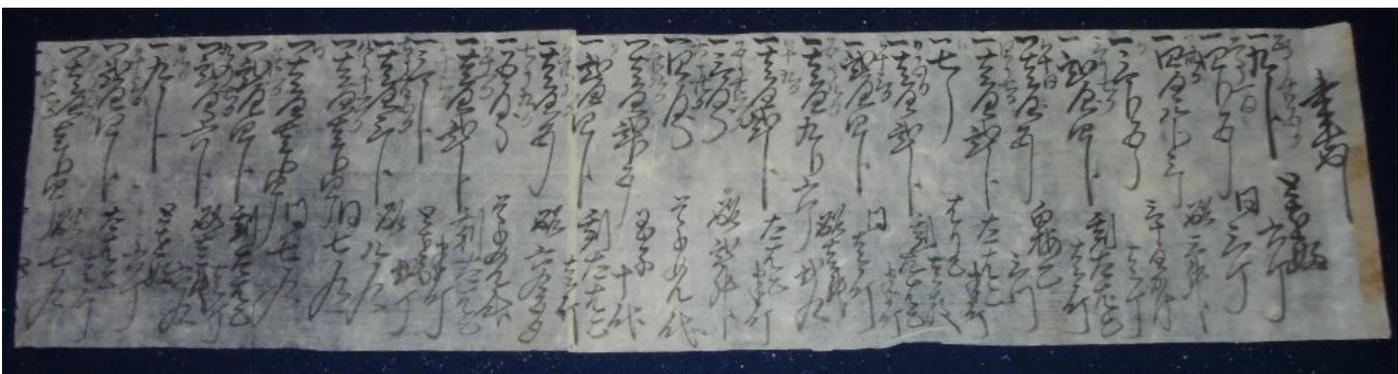
「そうめん代」と記載

・玉子 五月に一回購入 貴重品か

その個数蘭に十代とある。単位不明。

・不明の品 三十瓦かけ、白梅乙

移動スーパリーのような行商がきていたんだろうか、それとも注文通販みたいのがあったのでしょうか。これら日用食品と違った品が書かれた下張りがありました(左写真下側)。正確に全文翻刻



出来ていないので、不明点多いのですが、同じ形式の下張が何枚があり前項の日用品でない名蚊や、碁盤、萌黄、上男物、藍など)とその代金が数ヶ月に渡り記載されています。十二月に〆百貫・・・と締めています。その後文字が切れています。「右之通り引合■」と読めます。品が雑多で一つの店ではないように思いますので請求書ではないとすると、最後の引合の文字が気になります。関連の下張を日付けなどで繋げ、翻刻しないと何の文書か確定できません。いずれもツケでの購入に見えます。盆と正月の支払いだったのでどうか。

◆断片・算術

算目録の勉強帳(下側写真)に

- 一 一七 九々八拾一 一 一 九
- 四九卅六 一 一 四 六九五十四
- 一 一 六

とあります。インイチガイチ、インニガニ・・・と声出してやりませんでしたが。写真下左がその表紙で中心の両側に点々と穴が開いています。四つ折りにして綴じていたのでしょうか。表紙に「文政八年 〇一 乙酉 十二月吉日 算目録」とあります。何か教本を写したのかも知れません。十一之段、上に十二之段の区切り、「引」「倍」「戻」など機能が不明な文字がありますが、藩政時でも掛算を勉強していました。

今回の見付けた資料ではないですが、算術関連の本で天保五年に発行された本「算法出世實大全」があります。

そこに「開立九九の声」の頁があり 二二が四でなく八、三三が九でなく二十七、三乗の九九です。別頁に木の高さ測定問題が出ています。これには角度測定の分度器が必要です。それを恒之進が江戸で「凡分度」(下写真左)を購入しています。

高さ測定は三角関数のタンジェントの問題です。三角関数は中学の学習と思いますが、一般にこのレベル出来ていたのですね。三角関数表はあったのでしょうか。

暦の算出式は閉鎖的だったようですが、もう少し複雑な計算をしていたようです。

以上

